

## 江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集「江戸時代、子供たちはお正月をどう過ごしていた?」	1~3	見学会「再訪・江戸城周辺の探訪—その1」	7
新年祝辞・江戸博竹内館長/友の会松原会長	3	会議・会合日誌	7
友の会セミナー「江戸博物と好奇心」	4	えど友プラザ「続・江戸中期の石仏たち」	8
特別観覧会「いけばな～歴史を彩る日本の美～」展	5	「水練場」	8
江戸博クリップ「車両から見える景色」	5	えど友サークルだより	9
見学会「広重『江戸百景』周辺の探訪—その1」	6	落語で江戸散歩…⑫【天災】	10
		催事案内/会員優待のお知らせ	11~12

## 新春特集

## 江戸時代、子供たちはお正月をどう過ごしていた? —江戸博・石山秀和専門研究員に聞く—

あけましておめでとうございます。  
江戸時代、お正月の子供たちは何をしていましたか？ どんな遊びをしていたか？ 等を  
知識豊富な江戸博・石山秀和専門研究員におたずねしました。  
石山研究員は『守貞謨稿』と『東都歲事記』の頁をときおりめくりながら、  
当時の江戸の町のことを丁寧にお話しされ、  
さながら時代の中に迷いこんだような思いがしたものでした。



出席者 石山秀和(江戸博専門研究員)  
聞き手 小林弘明(事業部会)  
深尾恵美子(広報部会)  
藤井文乃(総務部会)  
司会 松原 良(広報部会)

## ◆◆謎の人物、喜多川守貞◆◆

松原 まず、本日お使いの『守貞謨稿』、ご存じの方もいらっしゃいますが、全然知らない方もいらっしゃいますので、その辺からお願いします。

石山 書いたのは喜多(田)川守貞という人で、いまとなっては大変ありがたいことに、いろんなことをおもしろおかしく隨筆風に書いています。一種のルポルタージュですね。それに、江戸だけではなく、京都や大阪のことにも触れており、それぞれの地域を体験談風にまとめて三都比較をやっているのです。

松原 それに絵が沢山あって分かりや

すいですね。

石山 当時の風俗がよく分かり助かります。時代としては幕末の記載が中心です。時代考証家でだいぶ前にお亡くなりになった杉浦日向子さんは、この本(『守貞謨稿』)をよく読まれていたのでしょう。“当時、江戸では……”と説明していましたが、物価や細かな描写などの情報は間違いなく参考にしていたと思いますね。

藤井 この方はどんな人だったですか？

石山 実はどんな人なのか、よく分かっていません。武士ではないようです。町人だと思うのですが、何をしていたか、ということになりますと、どうも商人ではなかつたか、という程度しか分かっていま

せん。いまとなっては謎の人物です。文化7(1810)年に大坂で生まれ、天保11(1840)年に江戸に移ってきたと、『守貞謨稿』のなかで自身が述べています。ちなみに、「喜多川」は借字で、本当の姓は「北川」だそうです。

深尾 当時、この本はよく知れわたっていたのですか？

石山 意外なことに、当時出版されていないのです。だから、書いた喜多川守貞の周りの人だけしか知らないかった。謨稿の稿が原稿の稿のままというがそれをよく物語っています。長い間、原稿のまま埋もれており、古本屋から国会図書館が購入したのを機に、明治41(1908)年にはじめて翻刻出版されています。それでやっと世の中に知られるようになったのです。

## ◆◆羽子板の派手な絵は江戸から◆◆

松原 それでは、そろそろ本題の遊びのお話をお願いします。



石山秀和さん



**小林** 当然、商人と武家では子供の遊びは違っていたのでしょうか?

小林弘明さん

**石山** 武家屋敷にいる子供と町人の子供とでは根本から違いました。武家では年始から行ったり来たりの格式高い挨拶回りが大人にはあり、一家団欒のお正月というわけにはいかなかつたでしょう。

これに比べて、長屋住まいの町人たちは、家族全員で正月を祝いました。ただ、町中に住んでいた小身の武家ではもう町人とほとんど変わらなかつたと思いますよ。

**深尾** お正月といえば、まず羽根つき、ですか?

**石山** そうですね、『守貞謨稿』にも、正月の女性だけの遊びとして羽根つきや手鞠などを取り上げています。

**松原** 羽根を落とすと、スミを付ける、なんてことは? (笑)

**石山** この本によりますと、そこまで書かれていませんね(笑)。ところで、羽根つきで使う羽子板ですが、これはそもそも昔から、羽根をついて子供が病気などに罹らないようにする魔よけだったのです。それが、いつのまにか飾り付けられ、歌舞伎役者や力士など、当時の有名人が描かれるようになりました。桐板と押絵の飾り付けはこの頃から生まれました。

**小林** 当時、浅草の羽子板市はあったのですか?

**石山** ええ、ありました。浅草寺(觀音さま)の年の市が今日では有名ですが、江戸時代には深川八幡、愛宕神社、神田明神などさまざまところで年の市がおこなわれ、羽子板も売られていました。

**深尾** 羽子板の絵ですが、江戸も京都も同じだったのですか?

**石山** いや、



深尾恵美子さん

京阪(坂)は江戸と違っており、はじめは押絵の飾り付けがなかったようです。それが、人やものの交流からでしょうか、江戸の絢爛豪華な羽子板を真似て、京阪でもだんだんそなり、幕末には同じような飾りのあるものになつたようです。

### ◆◆鳥賊をのぼす?◆◆

**小林** たこ揚げは江戸でもやっていたのですか?

**石山** たこ揚げは風が強い季節であれば問題がないので、必ずしも正月とは限らないでしょうが、春陽のころ、といいますから、春先2月から3月ごろですか、その頃までは子どもたちがよく揚げていたようですね。

**小林** その頃は関東もよくからつ風が吹きますからね。

**石山** そうそう、それで面白いことがあります。たこの東西を比較してみると、こちらは「たこ」ですが、関西では「いか」と呼ばれており(笑)、揚げることを大坂では「のぼす」と言つたそうです。

**松原** それはどんな字を書いたのですか?

**石山** カタカナでイカ、漢字ですと食べる烏賊と同じ、つまりカラスという字に海賊や山賊のゾクという字です。

**松原** たこにいかですか、面白いですね。足が8本や10本だったりして……(笑)。

**小林** 当時、傘はりの内職をやっていた浪人がたこも作ったのでしょう、そんなことは書かれていませんか?

**石山** それは書かれていませんが、作つたことは想像に難くないですね。傘張りの作業とそれほどかわらないでしょうから。また、季節ものですから、沢山作つて、いい収入になつたのではないかと思います。それから、お正月の15、16日は宿下がりで、丁稚さんが親元へ帰つたこの2日間は、江戸でもっとも盛んにたこが揚がつたそうです。子どもたちの正月遊びのなかでも代表的なものだったのでしょうか。

**小林** 種類はどんなのがあったのです



▲溪齋英泉画「四季の遊 正月」

か? 奴だこなんかありましたか?

**石山** 奴もありましたね。その他沢山ありますよ。蛸のたこ、イカのたこ、いろいろな武者絵、火消し組合の文字「い」とか「め」など、また漢字1字、龍、寿、錦など、字だこは絵だこより安かつたようですね。この『東都歳事記』にある“お正月の風景”は、晴れ着を着た人々とともに遠くの空に沢山のたこが揚がつているのが描かれています。

### ◆◆大人ももらえたお年玉◆◆

**小林** 双六なんかはどうですか?

**石山** やつてました。ただ、なぜか分からぬのですが、この『守貞謨稿』には双六売りのことは触れられていません。一方、『東都歳事記』には、お正月になると、双六売りが「すごろく! 双六!」と呼び声を掛けながら、町の中を歩いていた、と書かれています。

**藤井** どんな双六があったのでしょうか?

**石山** 大名出世双六や道中双六、それに人生双六などで、丁稚から始まる人生双六は失敗すると、こじきになつたりして……(笑)。大名出世双六では次第に上位の役職に就いていき、勘定奉行になつたり、老中になつたりして、最後のあがりになる前が大老で、將軍であがりでは畏れ多かった、ということでしょうか。最後の升目は「上」なので、これを「上様」(公方様・將軍様)としたのかも知れません。

**藤井** お年玉は?

**石山** ありましたが、今日のような現金を与えるものではありませんでした。一般には縁起物としてお餅をお年玉として差し上げることが多かつたようです。また、必ずしも大人から子どもへ

# 新年祝辞

江戸東京博物館 館長 竹内 誠

明けましておめでとうございます。

友の会の日頃の充実したご活動に心から敬意を表しますとともに、本年の一層のご発展をお祈り申し上げます。

さて、昨年は民間企業とのコンソーシアムによる江戸博運営の元年でした。この大きな転機も、みなさまのご支援により無事に乗り切ることができました。

また、話題となった特別展「珠玉の輿」にはじまり、質の高い内容の特別展や企画展を実施することができ、とても多くの方々にご覧いただきました。そして常設展示のリフレッシュについても検討を開始し、あたらしい江戸博を創る道筋をつけることができました。このことも大きな成果と思っております。

末筆ながら、本年もみなさまに一層愛され、親しまれる江戸博を目指して、館員一同心を新たに努めてまいりたいと存じます。よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

# 新年祝辞

江戸東京博物館友の会 会長 松原 良

新年おめでとうございます。会員の皆さまにとって、今年も輝かしい1年となりますようお祈りいたします。

昨年はセミナー、見学会など従来からある各事業やサークル活動に多数の会員の皆さまのご参加をいただくとともに、友の会として初めての試みである「えど友研究発表会」を開催し会員3氏が日頃の研究成果を発表するなど、新しい事業も展開してきました。また、「文政町方書上翻刻プロジェクト」が本格的にスタートし、江戸博のご指導の下順調に翻刻が進んでおります。これらいずれも関係の皆さまのご協力、ご努力の賜物と深謝しております。

本年は友の会創立10周年にあたります。現在、できるだけ多くの皆さんにご参加いただけるよう多種多様な「10周年記念事業」を展開すべく、役員、部会員を中心に検討を進めています。どうかご期待いただくとともに「会員自らが参加し創造していく会」となりますよう、皆さまのご積極的なご参画をお待ちいたします。

与えるものではなかったのです。子供の話から少し外れますが、一枚刷りの「役職武鑑」や書家、茶道等文人の人名一覧表があり、これも配りものとして、大人に対するお年玉として使われました。「役職武鑑」は今年、老中は誰それ、あの役人の担当は〇〇と書かれていて、公事宿などでは、当裁判や訴訟などで係争中の人们に配っていました。また、文人の一覧表ですが、どこそこに誰それがいる、という情報を習いごとに熱心な庶民に流していたわけです。

## ◆◆年末から書いた書き初め◆◆

小林 この一覧表は今の番付表ですね？

石山 そう、まさに番付表でした。書家などの文人の名前などもこうした一枚刷りから知ることができます。書家について触れたので、正月の子どもについてこれも触れておきたいのですが、それは書き初めです。書き初めは正月に書くものと思われがちですが、誰もそうですが、上手に書きたい、人から良い評価を得たいと思うのが人情ですので、実際には年末から沢山練習をしてきて、上手く書けたものを書き初めの日に寺子屋(手習塾)に持つて行っ

たようです(笑)。

松原 それでは、書き初めにならない？

石山 そうなんです。と言いますのは、書き初めした紙は寺子屋の壁にずらりと貼り出されて、子どもたちのみならずご近所までにも一般公開され、父兄が見にきて、誰それちゃんはうまくなつたな、だれそれ君は相変わらずだな、と話のタネにされたからです。だから、早くから懸命に練習をしてほめてもらえるようなものを持っていった、ということでしょう。また、書き初め当日は、子供たちはその力作を提出すると、あとは先ほどのお年玉のお餅やお菓子を食べ、福引きなどの遊びをおこなって、お師匠さんからお手本や文房具などをもらっていたようです。

深尾 書き初めはやはり2日ですか？

石山 だいたいそうですが、なかにはけいこ始めが7日というところもあり、そこでは7日が書き初めになりました。



藤井文乃さん

藤井 初詣などには行ったのですか？

石山 『東都歳事記』には、初詣、初日の出で沢山人が

集まるところを3箇所あげています。

ひとつは深川の洲崎弁天、次が高輪の海辺、現在の品川駅あたりになります。そして、最後に高台になっている神田明神です。当時はすぐそばが海で素晴らしい光景が広がっていたでしょう。でも、同じ高台なら愛宕神社も良かったのではないかと思うのですが、あそこは高台ですから、愛宕山からの眺めは最高だったと思いますよ。

松原 本日は

『守貞謾稿』

から始まつ

て、たこ揚げ

や羽根つきな

ど多くのこと

を、長時間に

わたってお話しいただきありがとうございました。

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

―― ☆ ―― ☆ ――

この『守貞謾稿』は、博物館7階図書室で閲覧できます。書名は『類聚近世風俗志』(上・下巻)で検索してください。また、是非とも手元においてじっくり読みたいのであれば、岩波文庫から『近世風俗志』(全5巻)として出版・販売されており、こちらも読みやすく便利です。(編集部)



松原良さん

## モノづくりと好奇心

江戸時代、日本は200年を超える平和な社会を実現していました。こうした平和の時代に、日本人の気質は築かれていると思います。ケンペルも「鎖国論」で、鎖国は日本の最もいい政策で、地上の楽園が築かれたと述べています。そもそも日本人は、自然と長く共存し、山川、葉っぱ、無機質な石までにも心があると考え、モノのあはれ・モノのけ・モノづくり等、日本人はモノに対して独特の関心を持っています。その関心が平和の中で育まれ、新しい知識、未知のモノに対し好奇の目を向ける気質が育きました。そこに、近現代の日本の「モノづくり」に直結する科学や技術に対する考え方を見ることができます。

## 平和な時代の技術開発

江戸という平和の世が好奇心を育みました。もっと楽しいものを、もっと驚かせたいという、平和だからこそ繁栄した遊びの中で素晴らしい技術が作られました。歌舞伎の回り舞台、せり上がりもその一例です。オランダ人もからくり人形を見て驚きました。

遊び以外では、人々のために、何の役にたつかという発想で技術開発がされました。例えば、輸入された空気銃は平和では役に立ちません。その技術で作ったのが日々使う無尽灯です。

和時計もそうです。西洋から入ってきた機械時計を自分達の暮らしに合わせて不定時法の和時計を作り出しました。日常の時計で天体時計を作ったのは日本だけです。さらに時計機構応用の扇風機まで作られています。

## 天を測り、地を測る

江戸時代日本は世界で最も裕福な国一つでした。マテオ・リッチが描いた当時の世界地図には、日本の近海には銀島、金島があると描かれています。鎖国はしていても、日本の金・銀・銅

# 「江戸博物と好奇心」

講師

鈴木  
一義さん

(国立科学博物館科学技術史グループ・グループ長)

第86回 江戸東京博物館友の会セミナー

(2009.10.31)



や海産物などが日本から輸出され、最先端の情報もオランダや中国を通じて流れていきました。

鉱山資源開発には、土木技術、地質技術などの高度な知識が必要ですが、江戸時代、そういう知識や技術があったのです。例えば、小判は金と銀の合金なのに、なぜ山吹色なのかというと、表面上だけ銀をとりのぞき金だけを残す技術があったからです。

伊能忠敬は高橋至時に地球の大きさを聞き、日本を測量することを思い立ちました。フランスでメートル法を制定するために三角測量で地球を測量した頃、伊能忠敬はその検証のために日本を測量したのです。各地で何百人の作業部隊が行った割に、地図の誤差が小さいということから全員が理解して作業していたことがわかります。誰でもが買えた道具カタログが示すように、忠敬を通して、最新の測量知識と技術が日本各地に伝わったのです。

## 殿様達の好奇心

江戸時代は平和なので、本草好きな殿様達は、さまざまな標本や絵図などを作っていました。殿様の娯楽です。

その中には、世界的にも珍しい150年前の昆虫標本があります。日本独自の保存方法で分類されてきれいに残っています。薩摩藩当主島津重豪も、赤坂に大動物園のようなものを作り、自分の庭で飼っていたものを写生しています。その他にセミ、カブトムシなどの定番から、人魚のミイラ、天狗の肌、サメの歯など、珍しいものまで、殿様達は互いの情報網の中で教え合い、標本作りに励んでいました。

また、当時輸入された顕微鏡も人気でした。顕微鏡を使って殿様達は寒い中震えながら雪の結晶を写したり、小さな蚊を観察して記録しました。ヨーロッパでは上級階級の人達だけが楽しんだ知識が、平和な日本ではアッという間に漫画や着物の柄などになり普通の人達に広まりました。そしてそれが皆的好奇心を刺激し、科学が当たり前に普及していったのです。

## 何の役に立つか

しかし、楽しんだだけではありません。例えば、本草好きの大名によるカイコの一生の写生があります。好きなだけではできません。虫の一生ですから、一年かけて虫の生態を観察します。

この写生の目的は、カイコの一生という科学的説明と、カイコの飼育という技術が結び付いた農学書を作るためです。地域の殖産興業のためにやっているのです。農学書という考えは日本独自のものです。シーポルトが持ち帰り、フランス版が出るほど優れた本が、日本で作られていました。ヨーロッパに日本から伝わった植物も、そのような育種本とセットで運んだので根付させることができたのです。

モノのあはれ、好奇心なども含め日本が培ってきた江戸の文化と日本人の気質は、グローバル性や生物多様性を維持し、世界を豊かにすることにつながると思います。

【記録】文・写真：広報部会 深尾恵美子

## 江戸東京博物館友の会特別観覧会

(2009/11/27)

### 特別展「いけばな ～歴史を彩る日本の美～」



特別展「いけばな」の友の会特別観覧会が11月27日(金)の17時から開催されました。この展覧会は10月3日から11月15日まで京都文化博物館、11月23日から1月17日まで江戸東京博物館で開催されるものです。

花咲き乱れる極楽浄土のイメージで、仏前への供花は古くから行われました。春日権現記絵等の絵巻にも仏前の供花が見られますし、鳥獣戯画で蛙のご本尊に猿の僧正がお経を読む場面にも供花が描き込まれています。京都紫野今宮神社のやすらい祭の風流花傘、奈良の春日大社若宮神社の千切花等は、古くから神々に捧げた飾り物です。平安

時代には「花合せ」というゲームが公家の邸で開催され、室町時代には、公家に感化された幕府の武士たちにもこれが盛んになりました。そして将軍の周辺の同朋衆から造園・座敷飾りの専門家が、いけ花の伝書を書くようになりました。もちろん古今伝授を始めとして、さまざまの芸が秘伝化されて伝授された一環として、いけ花もあったのでしょうか。安土桃山時代にはその時代の文化に同調して豪勢なものになります。文禄3(1594)年前田利家邸に豊臣秀吉が招かれた時に池坊専好が飾った大砂物は“池坊一代の出来物と風聞”されたと伝えられますが、展示ではこれをコンピューター画像で見ることができます。

江戸時代には公家や武家、僧侶や町人までいけ花に参加しました。この時代に流行したのは立花で、上流文化人は立花の会を催して楽しんでいました。御所では後水尾天皇の周辺で立花が盛んになり、二代目池坊専好の一派が寵愛を受けました。元禄時代には立花は男のたしなみとされたのだそうです。江戸の町人達には秘伝とかでうるさい立花よりも、「抛入花」が好まれるようになりました。江戸の後期、文化(1804~1829年ごろ)にはいけ

花諸流派が発生し、家元制度も確立しました。これは茶道やいろいろな芸事と同じ、時代の波であろうかと思います。江戸中期以後は男女の教養書や啓蒙書にもいけ花は多く取り入れられました。後期になると美人が花を生ける浮世絵も多く版行されました。

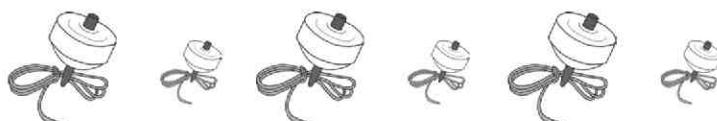
明治になるといけ花は、海外にも紹介され、欧米に知られるようになりました。

特別展は以上に概観した「いけ花」の歴史を広範に、書画、文献、器物等により展示したものです。

観覧会は最初に橋本由起子学芸員の解説があり、参加者は自由な見学に移りました。当日の参加者はいつもの特別観覧会よりも、かなり少ないよう見受けられました。美術史的に高度な、このような展示は大衆向きではないのかも知れませんが、「いけばな」というタイトルにもう一工夫出来なかったものかと思います。

この特別展の図録は大勢の共同執筆になっていますが、江戸東京博物館からは橋本由起子さんが参加し、図版や各章の解説とコラムや「いけばな年表」を執筆しています。その中で「いけばな年表」は優れた労作だと思います。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦



## 江戸博クリップ

### 「車両から見える景色」

学芸員 齋

藤 優 美

私はつくばエクスプレス(TX)で通勤しています。TXといえば、つくば・秋葉原間58.3kmを最速45分でつなぐ、最高速度130km/hの高速鉄道です。さすがに通勤時間帯は外の風景を見る余裕はありませんが、普段はその早さゆえにあつという間に変化していく景色が楽しめます。茨城の区間では、のんびりとした農村風景が広がり、柏市域に入ると土地開発の過程が見られます。埼玉のあたりまで来るとマンションなどの建造物が連なり都市らしくなり、北千住に入ると、

いよいよ都心という感じがしてきます。

民俗学者の柳田国男は、1909年に講演で、関東の村は「青い」、畿内の村は「白い」と述べています。関東の集落は田畠の中に屋敷林に囲まれた一軒家がぽつぽつと建っているのに対し、関西方面の村は白壁の屋敷が密集しているためです。90年後、同じく民俗学者の福田アジオは集落景観について、関東は「緑」、関西は「黒」と書きました(『番と衆』1997、吉川弘文館)。これは戦時下に関西の白壁が

黒に塗られたことに加え、福田が見た景観が新幹線からの眺めだったことによります。高架の車窓から眺めたため壁よりも瓦葺の屋根が目に入り、更に高速のため「黒い塊」のようにさえ見えたというわけです。

狭い日本、そんなに急いでどこへ行く…と言いますが、なかなか高速鉄道からの景色もおもしろく捨てがたい。また、旅に出たくなってきました。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

# 「広重『江戸百景』周辺の探訪—その1—

(日本橋北周辺)



当日は曇天で肌寒さを感じる天気となりました。今回の見学会は広重『江戸百景』の中から、日本橋より、北部に当たる室町・本町・紺屋町・小伝馬町・大伝馬町・人形町を中心に約3時間、13班に分かれ、およそ160名の会員が散策を楽しみました。広重の『江戸百景』は安政期（1850年頃）の江戸の四季、風景、風俗を題材とした作品ですが、今回はその描写場所と思われる位置を確認し、今日の風景と比較して、これまでの変遷に触れることが主眼でした。まだ1世紀半余りしか経っていないのに、それがこんなに変わってしまうのかと、改めて驚きを感じました。



▲日本橋集合風景

集合場所の日本橋近辺は江戸の中心的商業地でありながら富士山が見られて、景勝地でもあったことがうかがえます。当時の日本橋魚河岸・長崎屋・大丸屋跡等は跡形も無く、現在からは想像もできないくらいで、大変驚かされました。

## 日本橋・神田界隈

まず初めは「日本橋江戸ばし」(43景)で、日本橋欄干から日本橋川の下流を描いています。左側には魚河岸がありましたが、関東大震災により、市場は築地に移されました。次に「日本橋雪晴」(1景)ですが、43景とはちょうど反対側、日本橋から江戸城方面を俯瞰した雪景色で遠くに富士山が描かれています。今は高速道路とビル街で富士山はかけらも見られません。

さらに北に進んで次は「する賀てふ」(8景)で、当時の越後屋(今の三越)から遠く富士山を望む絵です。これも今では富士山を見ることがまったくできません。

そしてさらに北に進んで神田駅近くの「神田紺屋町」(75景)ですが、生地を染める紺屋の干し場から西南の町並みと富士山を望んでいます。当時はこの辺は染物屋が多く、ほかにも幕府に物を納めるため職人が住みつき、江戸の大商業地として栄えたところです。これも今となっては残念ながら、その面影はほとんど感じられないものの、職人らしき店はわずかに残っており、商業街として脈々と息づいているのだなと思いました。

## 大伝馬町・小伝馬町界隈

ここで東に向かい大伝馬通りに出ます。まず今のイトーピアビルのところが「大てんま町木綿店」(7景)で当時



▲大丸屋跡前で広重の絵と見比べる

木綿問屋が並んでいた様子が描かれています。そして大伝馬通りを交差する人形町通りを越えて進み、大丸屋跡・現織維問屋タキトミあたりが「大伝馬町ごふく店」(74景)です。呉服店の前を建前祝いの行列が行くさまを描いています。どちらも今はその面影もないのですが、しばし往時をしのびました。

## 金座跡・長崎屋跡・十思公園など

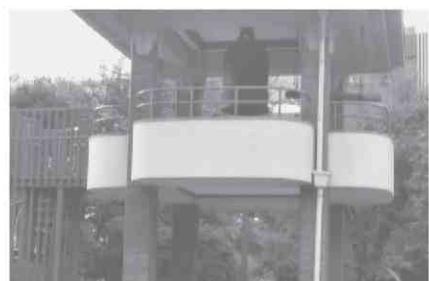
以上6枚の絵が今回の中心ですが、



▲長崎屋前の説明板に見る

このほかにもこの界隈の史跡・名所も見て歩きました。

主なところは、江戸の金座跡（日本銀行本店）、十軒店跡、長崎屋跡（薬種問屋でオランダ商館長参府の定宿）、時の鐘跡（現在鐘はここではなく、次の十思公園にある）、十思公園（時の鐘と吉田松陰らが処刑されたと言われる小伝馬町牢屋跡）、小津和紙店、相森稻荷神社、芝居小屋中村座跡・玄治店跡、元吉原などです。



▲十思公園にある時の鐘

十思公園では、普段は下から見るだけの時の鐘の鐘楼に特別上らせてもらい、時の鐘を目前に見ることができました。また小伝馬町牢屋敷の模型も特別に見ることができました。

これらを見て、江戸時代から明治・大正・昭和・平成の遍歴を感じることができました。朝から今にも降り出しそうな空でしたが、終わりに近づいた人形町では曇り空から泣き出し始めました。まるで我々の散策の終わるのを待ち構えていたかのように思いました。

歩き終わって大変有意義な一時だったと感じました。

【記録】文・写真：広報部会・岡本静雄

# 「再訪・江戸城周辺の探訪ーその1」



小春日和の中、東京駅から丸の内に出て最初のガイドは道三掘。今ではビルの谷間に消え「一石橋」「辰の口」の名にしのぶのみです。家康が築城のために作った堀で資材の水上搬入路でした。名前は幕府のご典医だった「曲直瀬道三」の屋敷があったことに由来。堀の終点には和田倉門があります。「わだだ」とは海の古語で、日比谷入江の奥に位置して倉が並んでいたという意味。

和田倉門から、内堀に沿って歩き大手門から入城（ここから東御苑）すると、皇宮警察の楽隊行進に出会えました。天皇陛下即位20年を祝う儀装馬車のパレードでした。

同心番所・百人番所を見て、本丸に入る最後が中の門大番所です。堅固な枠形門の石垣は大きな切石で立派、「天守閣の復元は難しくても、門の一つ位は復元してくれたら良いね」との声も出ました。いよいよ中雀門（玄関前門）跡を登り本丸台（本丸御殿跡）に至ります。すべての登城者はここで大小刀を預け、御三家も乗り物を降りました。

本丸台の曲輪に沿って歩くと副天守とも呼ばれた富士見櫓があります。「外

から見上げると、石垣の上にそびえて大きく見えますね」との説明も。ここから西は皇居（西の丸）で、土手の上に金網が続きます。「子供だったらちょっと入って見えるかな？　いや、センサーがあるでしょう！」



▲本丸南端に建つ三重の富士見櫓

松の大廊下跡は石碑があるだけ。かつては幕府中枢の所で、廊下の後には御三家の控間もあり、人通りも多い廊下でした。「ここで刃傷におよんだといわれていますが、吉良家に残る絵ではつながる竹の廊下が描かれ」との異説も紹介されました。富士見多聞は攻防の要所で、15の多聞の内ここだけが現存。このあたりから大奥の敷地で、本丸御殿の半分以上をしめていました。

北の角にそびえる大きな石垣、天守台は明暦大火の後に前田家が再築した

のですが、天守は再建されませんでした。天守の金明水井戸や土手沿いの石室は城外への抜け穴の入口ともいわれています。



▲明暦大火後に再建された天守台

本丸から汐見坂を下り、紅葉の中を昭和40(1965)年に復元された二の丸庭園を歩き、くつろぎました。「今まで来た中で一番きれいな紅葉です」と説明する方も満足気でした。「庭より陛下が見えた方が良かったわ」との通行人の声も。

最後に太田道灌の時代の城址で、山王権現・天満宮のあった梅林坂で道灌の植えた梅林を見たあと、平川門を見て北桔橋門より城外に出て、竹橋で解散しました。今回は再訪の「その1」でしたが、「その2」以降の再訪を望む声も多く聞かれました。

【記録】文・写真：広報部会・島尻茂樹

## ◆役員会

10月15日(木)17時開催。会計より21年度上半期実績の報告があった。10周年記念事業計画の方針、「友の会規約」見直し案などを確認。出席者10名。

11月12日(木)17時開催。10周年記念事業計画の中間報告、「友の会規約」見直し案を引き続き検討。出席者12名。

## ◆事業部会

10月1日(木)17時開催。9月の事業報告、古文書講座の申込状況を確認し、今後の事業計画を決定。出席者20名。

11月5日(木)17時開催。10月の事業報告と今後の事業計画を確認した。見学会の実質参加者数の把握について

## 会議・会合日誌

2009／10～2009／11

議論した。出席者20名。

## ◆広報部会

10月23日(金)14時開催。『えど友』52号の校正と次号の方針の確認、10周年記念事業担当作業について話し合った。出席者14名。

11月20日(金)14時開催。『えど友』53号の新春特集、年末入稿スケジュール、記念事業担当作業について確認。出席者13名。

## ◆総務部会

10月28日(水)13時開催。『えど友』52号の発送業務、次号の日程確認、次の三部会合同会議に関し話し合った。出席者16名。

11月25日(水)13時開催。記念事業担当作業、三部会合同会議の内容、次号の日程確認等を行った。出席者15名。

## ◆文政町方書上翻刻 プロジェクト

10月1日(木)、15日(木)、11月5日(木)、19日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各8名、8名、8名、9名、(B)各10名、9名、6名、9名。

## 続・江戸中期の石仏たち 一江戸川区の墓標石仏一

どうめい  
百目鬼喜久男

江戸川区の私の家の周辺には数多くの寺院があるが、その墓域には、元禄、享保を中心とした江戸時代中期に建立された沢山の墓標仏が残されている。昭和57(1982)年の調査によると、江戸川区内で約4,700基の石仏が確認されており、その大半が墓標仏である。墓標仏が多いのは真言宗と浄土宗の寺院で、日蓮宗の寺院に少ないのは教義の違いによるものであろうか。墓標仏の種類は、阿弥陀如来、聖観音菩薩、如意輪観音菩薩、地蔵菩薩の4種類で、その中で最も多いのは如意輪観音であった。聖観音と如意輪観音の墓標仏に刻まれた戒名を見ると、故人が女性の場合が圧倒的に多い。江戸時代の庶民には、聖観音や如意輪観音は女性と考えられていて、その像に故人の面影をしのんだのであろうか。墓標仏で少数派である阿弥陀如来の戒名には男女の差は認められなかった。

江戸時代の庶民が競って如意輪観音の墓標仏を建立したのは、その容姿に亡くなつた女性の面影を重ねただけではないように思う。如意輪観音は本来、一面六臂で、6本の手で六道の苦から人々を救うことを誓願する姿を現しているという。如意輪という名称のとおり、その手に持つ如意宝珠と法輪の功德で衆生の苦を救い、願望を意のままに成就させてくれるといわれる。墓標仏の場合、手は2本だが、右手を頬に当てているのは衆生の救済について思惟している姿なのである。

江戸時代中期に製作されたおびただしい数の墓標仏が現在に残っているのは、専門化した石工によって量産され、

墓石商を通じて一般庶民に普及したからである。仏の功德を説くのは寺院の住職の務めだが、墓標仏を販売する墓石商たちもそれに加わったのではないかろうか。墓標仏の建立を決めるのは財力を持つ家長の男性である。建立者は仏の功德について墓石商から説明を聞き、如意輪観音の現世における功德を願い、この仏を選んだに違いない。

地蔵菩薩は全国的に見て、石仏の中では最も数多く作られた仏である。昔から村の入り口や路傍などに立ち、地蔵菩薩ほど一般民衆に親しまれ溶け込んで、生活を共にしてきた石仏はないであろう。これらの地蔵菩薩は丸彫りの供養仏であるが、墓標仏は仏の姿を浮き彫りし、故人の戒名を記した舟形の墓石である。地蔵菩薩の墓標仏に刻まれた戒名を見ると、その大半が○○童子、○○童女となっており、幼くして他界したわが子の冥福を祈り、親が建立したものである。地蔵菩薩は三途の川で迷っている幼い児を導き、また地獄に落ちた人を救ってくれる仏として、昔から多くの人々に信仰されてきた。如意輪観音は、現世利益を願って建立する要素も強いと思われるが、地蔵菩薩の場合は、現世利益だけでなく、死んだ者を救済してくれる仏と信じられ建立されたのである。

余談になるが、江戸時代は死者を埋葬する場合、火葬、土葬いずれであつたろうか。江戸川区教育委員会発行「江戸川区の民俗」によると、明治生まれの人々からの聞き書きには「昔（子供の頃）はほとんど土葬だった」としている。人口が密集している江戸市中はともかく、広い田畠の中に村や森が点在していた当時の江戸川区では、江戸時代から明治末期頃までは、土葬が主流だったのである。死者は棺桶に入れ、墓地に穴を掘って埋葬し、その上に墓標を建てた。墓域が整然と区画され、墓石の下に数個の骨壺を収めるようになっている現在の状態からは、土葬した当時の墓地を想像することす

ら難しい。ただ、墓域のひとすみに残された、下半分が土に埋もれた墓標に出会い、わずかに当時の土葬の名残をしのぶのみである。

## 水練場

手島義之

川の水がまだきれいだった戦前に、隅田川には水泳場（水練場といった）が点在していた。

〔「隅田川は河童天国で大賑わい」……隅田川で水泳……水泳場の少ない東京だが、隅田川の川岸の千住、浜町、月島や大森の海岸にかけて16ヶ所の水泳場ができた。伝統の水府流や神伝流などの妙技を見せる達人もいれば、浮袋などでぶかりぶかりという河童もいて賑わった。〕（朝日クロニクル 週刊20世紀 No54・大正4～5年）

〔「隅田川プール（写真入り）」……東京を流れる隅田川をせきとめて特設のプール。即席の観覧席を設けると、競泳会場にもなる。汚染の心配はなかったはず。都会を流れる川と人間の距離がずっと近かった時代を象徴する風景〕（朝日クロニクル 週刊20世紀 No49・明治39～40年）

隅田川に限らず日本全国どこの川でも見られた風景だったはずである。学校の水泳部も隅田川を利用した。明治20年代には学習院や東京帝国大学などの水泳場があった。隅田川の下流が遊泳禁止になったのは大正6(1917)年である。上流や沿岸に工場が増えて水泳に適さなくなつたのである。水練場は郊外へ移転していった。

昭和期に荒川放水路（現・荒川）が出来ると千住新橋付近がにぎわうようになる。岡本かの子の小説『混沌未分』（昭和11(1936)年）に水泳場がでてくる。主人公小初は水泳教師である。父敬蔵（青海流）の経営する水泳場は祖父の代から隅田川岸にあった。それが都会の新文化の発展に追い退けられて堅川筋に移り、小名木川筋に移り、

場末横堀に移った。そして、とうとう砂村（後に城東区砂町となる）のこの材木置場の中に追い込まれてしまったのである。場所は荒川放水路と中川放水路の二筋の川の中土手が切れて一緒になるあたりだ。父敬蔵は水を張った大桶の底に小石を沈めておいて、幼い小初に衝えさせたり、自分の背中に小初を負うたまま隅田川の深い瀬に沈み、そこで小初を放して独りで浮き上がらせたりして鍛えた。

この小説の発表されたのは、昭和11年である。岡本かの子（夫は岡本一平、そしてその子は岡本太郎である）は明治22(1889)年に東京の赤坂区青山で生まれた。父大貫寅吉は神奈川県

(橋樹郡高津村)の豪商(大和屋)であつた。7歳で京橋竹河岸に移る。幼い頃は多摩川のほとりで過ごし、武藏野を貫く多摩川の流れは岡本かの子の終生思慕してやまなかつたところであったという。幼時の記憶が『混沌未分』に生かされているのだろう。

永井荷風は『日和下駄抄』(中央公論 昭和32年・1957年)の中で「……明治大正頃には綺麗であった。その頃両国の川下にはヨシヅ張りの水練場が四五軒並んでいて……、思い返すと四五十年も昔の事で……」と記している。1957年より40、50年前というと、明治40年～大正6年(1907～1917)頃のことである。

明治時代、厩橋や両国橋の付近には江戸幕府伝統の向井流各派の水練場があり、浜町の両岸には、水府流太田派の水練場があった。その対岸の安宅河岸には神伝流の遊泳道場があったそうだ。

現代では、「川の水練場」とは過去の遺物となってしまったのである。今は幻となってしまった水練場について記してみた。

(参考資料:①ARA No 101 2004、②文学で探検する隅田川の世界 かのう書房 昭和62、③川が語る東京 人と川の環境史 山川出版社 2001、④江戸談義 現代に生きる小学館 2003)

## えど友

# サークルだより

### ◎活動概況

- ◆江戸東京を巡る会: 11月17日(火)「浅草橋から蔵前の歴史を訪ねる!」と銘打って、浅草見附跡から柳橋、夏目漱石住居跡、須賀神社、浅草文庫跡、榊神社、鳥越川水門、首尾の松と御蔵碑、蔵前神社、西福寺、鳥越神社、天文台跡、市村座跡などをまわった。参加者 26名。
- ◆落語と講談を楽しむ会: 10月27日(火)年1回の話合いがもたれ、年間活動の総括、会計報告のあと新世話人として伊東敏男さん、田中文彬さんを選出、今後1年間の計画を協議、決定した。参加者 15名。11月24日(火)月番の山内啓巳さんが落語「百川」についての蘊蓄と「わが落語人生」を語ったあと、落語「蒟蒻問答」を実演、かっさいを浴びた。その後、三遊亭円楽追悼で「仙祭」をDVDで聞いた。参加者 17名。
- ◆藩史研究会: 10月9日(金)大渡真司さんが三春藩の成立から廢藩置県にいたる三春藩の歴史について研究発表を行い、三春の神社仏閣や三春駒など盛沢山の関連説明もなされた。参加者 28名。11月13日(金)すでに研究発表の済んでいる武藏忍藩主松平家、備後福山藩主阿部家の菩提寺である天眼寺と谷中靈園に参詣、さらに同靈園の大名墓所なども参拝した。参加者は 16名。
- ◆古文書で『八丈実記』を読む会: 10月23日(金)、11月12日(木)、11月27日(金)に例会を開催。参加者は各 8、9、8 名。
- ◆江戸御府内八十八カ所をめぐる会【余聞】: 満願成就で8

月に解散したこのサークルについて、早稲田大学文学部の学生から卒論テーマ「巡礼と観光」の参考にしたいので話を聞かせてほしい旨、指導教官名を付記して依頼があった。すでに解散しているサークルだが多くのメンバーが「神田川を歩き楽しむ会」に所属しているため、その例会で協力を呼びかけ、11月26日(木)に8名がこれに応じた。どのような形にまとめられるのか楽しみ。

◆神田川を歩き楽しむ会: 10月22日(木)、25日(日)、29日(木)に外歩きの準備として、テキストの頒布、神田川の概要と対象ルートの説明、運営方法の説明などを行った。参加者は各 38、17、29 名。11月22日(日)、26日(木)に第1回として神田川源泉の井の頭池付近の大盛寺旧参道の黒門、道標、人頭蛇身石像などを見たあと同寺が別当の井の頭弁財天に参詣、同池をめぐり、神田川起点の水門橋から丸山橋(三鷹市井の頭)まで神田川に沿って歩いた。参加者は各 35 名、48 名。



●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。  
申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

## [天災]



落語界住民の多い三光新道

喧嘩っ早くてDV（家庭内暴力）亭主の八五郎、大家の家へ飛び込んでくるなり「すまねえか離縁状を二通書いてくれ」「おカミさんの分はわかるが、もう一通は誰にやるんだ」「一緒にいるこぎたねえババアさ」「バカやろう！あれはお前のお袋じゃないか、実の親に離縁状を出すとは、なんともあきれ果てた奴だ」ってんで、「人の道についての話を聞き、少しほとこを和らげて来い」と、大家さんは紹介状を持たせて長谷川町に住む紅屋の隠居、心学の先生を訪ねさせます。道々それぞれに悪態をつきながらも、教えられたタバコ屋裏で「べらぼうに意けるてえのはおめえかい？」「ちょっと違うようだが、手前が紅羅坊名丸。このお手紙による」とたいそう乱暴な方だそうだが、それでは少しお話をいたしましょう。先生いろいろと話をしますが、無学で気短かな八五郎には一向に通じず、得心が行くはずもありません。「気に入らぬ風もあろうに柳かな。ムッとして帰れば角の柳かな」「堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍…



▲人形町に新登場の「からくり櫓」

堪忍の袋をいつも首にかけ、やぶれたら縫え、やぶれたら縫え」「どうだ少しほとこを和らげてください。

な？」「いいや、まったくわからねえ」

## 天災とあきらめる

「広い野原の真ん中にわかの夕立にあつたらどうなさる、まさか天にむかって喧嘩もできまい。身にかかる災いは他人がやつたと思うから腹がたつ、天が行ったと考えればあきらめもつく。これすなわち天の災い、『天災』だ。何事も天災と思ってあきらめ、我慢しなさい」。かなりクサイ中味ながらも少しづつ諭された八五郎が、すっかり感心しながら長屋へ戻ってくると、長屋中がなんだか騒がしい。聞けば熊さんの家で離縁話がこじれ、前のカミさんがどなりこんできて、一悶着があつたとのこと。八五郎は仕入れたばかりの心学の例え話を、支離滅裂ながら説教まがいに熊さんにします。「おめえも前のかかあが来たと思うから腹が立つんだ。天が来たと思え、これすなわち天災だ」「なあに俺んとこは先妻だ」



▲人形町交差点角の「玄治店跡」

## 落語の愉しみ

落語の演目は300以上もあるそうで、人情噺や廓噺、怪談噺など沢山ある噺の中で、やはり好きな噺は、聞きつかじりや知ったかぶりを振り回す言葉のおかしさ、とんちんかんなやり取りが軽妙で滑稽なものです。「牛ほめ」「鮑のし」「大工調べ」「一目上がり」「青菜」「廿四孝」「廐火事」「雑俳」「道灌」など、ほとんどこのタイプです。

「天災」ももちろんこの仲間で、長期に亘りこの駄文シリーズを読ませた会員へ、この噺がオチになれば嬉しいです。まさに天災と思ってあきらめてください。



▲寄席「人形町末広跡」

## 人形町かいわい

心学者の紅羅坊名丸師をはじめ、長谷川町にはほかにも「百川」に出てくる常磐津の歌女文字師匠や外科医の鴨池玄林先生などが住んでいます。寡聞にして嘶は知りませんが「派手彦」という落語の主人公、美人の板東お彦師匠もいるそうで、落語界の名士が住人の町です。人形町の通りから細い路地があり、「三光新道」と誇らかにアーチが掛かっています。この一帯は江戸初期から吉原遊郭やら芝居小屋など一大歓楽街でした。明暦以後遊郭吉原は浅草観音裏へ、芝居小屋は天保の改革でやはり浅草猿若町へ移転し、跡地には普通の町屋や商家ができておいおい繁盛した次第。人形町交差点から南へ少し行った辺りは、享保から明治2(1869)年まで「蠣殻銀座」でした。町の賑いはさらに展開し、寄席では人形町末広もありましたなあ。さきごろ芝居や落語や火消しなど、この町の歴史に因む楽しい「からくり櫓」ができました。

『拠 無く鎌倉の谷七郷…慣れたりでえの源氏店』という与三郎の名科白から、『与話情浮名横櫛』とはてつきり鎌倉の話だと勘違いのまま、玄治店跡の説明での芝居の舞台とあり、これが今回の散歩のオチでした。いいやそりやムチ(無知)だ。

【取材】文・写真：広報部会・稻垣武志  
イラスト：同・松原良

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
〔注〕このシリーズは稻垣武志さんが12回を担当、ご愛読ありがとうございました。次号から書き手が岡田守弘さんに変わります。引き続きご愛読のほどお願いいたします。(編集部)

# 催事案内

## 古文書講座

### 第3期の残日程

古文書講座の今年度第3期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

#### ◆入門編

- ・講師：小松賢司さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：1月13日（水）、2月3日（水）、3月3日（水）
- ・時間：A講座は10:30～12:30  
P講座は14:00～16:00

#### ◆初級編

- ・講師：田中潤さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：1月20日（水）、2月17日（水）、3月17日（水）
- ・時間：A講座は10:30～12:30  
P講座は14:00～16:00

#### ◆中級編

- ・講師：長坂良宏さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：1月16日（土）、2月20日（土）、3月20日（土）
- ・時間：14:00～16:00
- ・会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1,2
- ・参加費：各講座とも全3回1,500円（初回一括払い）

【企画担当責任者】上田太一（事業部会）

## 友の会特別観覧会

### ●特別展「チンギス・ハーンとモンゴルの至宝展」

◆モンゴル帝国は、チンギス・ハーンが1206年に建国した騎馬遊牧国家です。本展は、謎に包まれたチンギス・ハーンと世界最大のモンゴル帝国を本格的に紹介するもので、中華人民共和国・内モンゴル博物院（騎馬遊牧民族やモンゴル帝国に関する美術品・資料13万点を所蔵）の協力により中国国家一級文物54点を含む159点の文物からモンゴル騎馬遊牧民族の足跡をたどる特別展です。担当の我妻直美学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- ・開催日時：2月5日（金）17:00～19:00
- ・申込締切：1月26日（火）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階映像ホール／企画展示室
- ・定員：130名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員500円・同伴者700円（当日払い）

【企画担当責任者】松原良（事業部会）

## ご注意！

セミナー、見学会をはじめ各種催事への申込者のうち当日参加されない方が最近多くなっており、申込者の20%にも達することがあります。このことが、できるだけ多くの方のご希望にそいたいという催事の趣旨に基づいて企画運営する上で支障を来たしておりますので、お申込をされた方はできるだけ出席されますようご協力ください。

## 友の会セミナー

### 第89回「『江戸名所図会』の成立について －斎藤家三代の編纂と出版』

講師 齊藤智美さん（文京ふるさと歴史館専門員）

◆『江戸名所図会』は、江戸の様子がわかる資料として、博物館の展示や江戸を紹介する書籍の図版などで目にすることの多い本です。そのため、江戸に興味のある方ならば、その書名を知っている人も多いと思います。有名な資料にもかかわらず、『江戸名所図会』がどのように出来たのかはあまり知られていません。『江戸名所図会』は、江戸の町名主である斎藤長秋、県齋、月岑の三代により編纂されました。三代にわたる編纂の過程と本が完成するまでをお話していただきます。

○講師略歴：さいとう・ともみ

明治大学大学院博士後期課程修了。史学博士。明治大学兼任講師も務める。

- ・開催日時：1月23日（土）14:00～15:30
- ・申込締切：1月14日（木）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員500円・同伴者600円（当日払い）

【企画担当責任者】西村英夫（事業部会）

### 第90回「北条氏照と八王子城」

講師 土井義夫さん（八王子市郷土資料館学芸員）

◆日本百名城に選定された戦国時代最後の大規模な山城・八王子城を築いた北条氏照とはどんな人物だったのか、築城から前田利家、上杉景勝を中心とする秀吉軍との壮絶凄惨を極めた激戦の末、落城までの史料に基づく経緯と、落城後400年を経て初めて大規模な発掘・保存整備が行われた八王子城址の概要について解説していただきます。

○講師略歴：どい・よしお

1947年生まれ。東京学芸大学教育学部卒業。八王子市郷土資料館学芸員、成蹊大学文学部非常勤講師。専攻は日本考古学。著書は『中世の城と考古学』（新人物往来社）など多数。

- ・開催日時：2月27日（土）14:00～15:30
- ・申込締切：2月18日（木）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員500円・同伴者600円（当日払い）

【企画担当責任者】柳澤誠一郎（事業部会）

## 見学会

### 「江戸博常設展を見る」

◆事業部会では最近入会されたみなさまを主な対象に、常設展示室の見学会を年1回程度開催しています。江戸博の5、6階に設けられている常設展示室をもっと知って、その楽しさを味わっていただければと思います。当日の展示室の案内は、展示ガイドボランティアにお願いしています。案内時間は2時間弱の予定です(企画展は除きます)。

今回は密度の濃い解説を考慮し比較的小人数で2回実施することにしました。第1希望日、第2希望日をそれぞれ明記してお申込みください。応募多数の場合は調整させていただくことがあります。

- ・開催日時：1月26日(火)、28日(木)12時45分集合。
- ・集合場所：江戸東京博物館・1階ホール前
- ・申込締切：1月19日(火)必着
- ・定員：各30名 同伴者可(はがきに氏名連記)  
\*申し込み多数の場合は新規入会者を優先します。
- ・参加費：無料(会員は集合前に各自で入場券(無料)入手、同伴者は入場券を購入の上集合してください)

【企画担当責任者】藤村武雄(事業部会)

### お申込方法

- ◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。  
「往復はがき」の必要はありません。
- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局

- \*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いない！
- \*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。  
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
- \*いざれも申込多数の場合は抽選となることがあります。
- \*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。
- \*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

## 会員優待のお知らせ

残り会期わずか、お見逃しなく！

### ●特別展

#### 「いけばな～歴史を彩る日本の美～」

会期 2009年11月23日(月・祝)～2010年1月17日(日)  
休館日：毎週月曜日と年末年始(12月28日～1月1日)  
ただし1月4日(月)、1月11日(月・祝)は開館、1月5日(火)は休館  
会員：一般 600円、65歳以上300円、大・専門生 480円  
同伴者：一般 960円、65歳以上480円、大・専門生760円  
\*小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

### 次回予告

### ●特別展

#### 「チンギス・ハーンとモンゴルの至宝展」

会期 2010年2月2日(火)～4月11日(日)  
休館日：毎週月曜日、ただし3月22日(月・祝)は開館、23日(火)は休館  
会員：一般 600円、65歳以上300円、大・専門生 480円  
同伴者：一般 960円、65歳以上480円、大・専門生760円  
\*小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

### 企画展のご案内

### ●企画展

#### 「旗本がみた忠臣蔵

好評開催中！

#### ～若狭野浅野家三千石の軌跡～」

会期 2009年12月12日(土)～2010年2月7日(日)  
会場 常設展示室5階 第2企画展示室  
  
「將軍綱吉と元禄の世—泰平のなかの転換—」

会期 2009年12月15日(火)～2010年2月7日(日)

会場 常設展示室6階

### ●次回企画展

#### 「えどはくでおさらい！明治・大正時代 ～教科書でみたあの人、この絵～」

会期 2010年2月16日(火)～3月28日(日)  
会場 常設展示室5階 第2企画展示室

総務部会長は藤井文乃さんに

総務部会では暫定的に部会長代行だった藤井文乃さんがこの度部会長に選出され、就任しました。

## 会報<えど友>第53号

平成22年1月1日発行(奇数月1日発行)  
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長) 副編集長：菅沼和男

編集人：佐藤幸彦、稻垣武志、岡田守弘、岡本静雄、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、島尻茂樹、内匠屋京子

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910